

東海 の 古 代

第206号 2017年10月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
 編集 : 石田敬一 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
 HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

景行紀と倭国

一宮市 竹嶋正雄

1. はじめに

中国史書が伝える倭国・九州王朝の動静は『晋書』四夷伝・倭人の条にある泰始二(266)年に邪馬壹国の女王・壹與が使者を派遣した記事「**泰始の初めに至り、使を遣わして譯を重ねて入貢す**」の後、『梁書』諸夷伝・倭の条にある晋の安帝七(413)年の倭の五王・賛の記事「**晋の安帝の時、倭王賛有る**」までの間、絶たれている。

しかし、倭国・九州王朝の動静は、「東海の古代」第176・177号(2015年4・5月)の「隅田八幡神社人物画像鏡銘文の考察」で明らかにしたように、古事記の天皇崩御年干支より仲哀天皇即位(357)年〔成務天皇崩御年乙卯(355)年の2年後より〕まで遡る事ができる。

つまり、真の動静欠如期間は267～357年の90年間となる。この間の九州王朝の動静を、景行紀を中心に読み解き、推考する。

参考資料として、小学館の新編日本古典文学全集『日本書紀』①(以下、新編『書紀』①という)、同『風土記』(以下、新編『風土記』という)、角川文庫『新訂古事記』(以下、新訂『記』という)を使用した。

2. 景行紀の要約

- a 元年～4年
即位と系譜、及び美濃より還り、纏向日代宮を造る
- b 5年～11年 7年間空白
- c 12年
豊前国、碩田国、日向国を平定する。
- d 13年
襲国を平定し、日向国の高屋宮に18年まで6年間滞在する。
- e 14年～16年 3年間空白
- f 17年
国名を「日向」とする。
- g 18年
高屋宮を立ち、夷守(小林市)・熊県(人吉市)・葦北の小島(八代市)・八代県の豊村(松橋町豊福)・高来県(島原市)・玉杵名邑(玉名市)・阿蘇国(阿蘇山)・高田行宮(大牟田市)・八女県(八女市)を経て的邑(うきは市)に到る。
- h 19年
日向より還り到る。
- i 20年
五百野皇女を遣わし、天照大神を祭らす。
- j 21～24年 4年間空白
- k 25～27年
武内宿禰が北陸から東国の地形、百姓の消息を調べ、還り報告する。

l 27年

8月熊襲が辺境を侵す。12月日本武尊、熊襲国に到り討伐する。

m 28年

2月日本武尊、熊襲と吉備・難波の平定を報告する。

n 29～39年 11年間空白

o 40～43年

日本武尊、東国平定に発ち、平定するも41年能褒野で死す。43年白鳥陵に葬られた。

p 44～50年 7年間空白

q 51～52年

稚足彦尊を皇太子、武内宿禰を棟梁之臣とす。皇后播磨太郎姫死に八坂入媛皇后とす。

r 53～57年

東国巡行と統治・交流。諸国に田部・屯倉を置く

s 58～60年

景行天皇、近江国の高穴穗宮に3年滞在した後、当宮で崩御する。

3. 景行紀の考察

(1) 景行天皇崩御年の考察

前述のように成務天皇崩御年は古事記の「乙卯の年」より355年である。そして、その年は成務六十年であるので、成務即位年は296年となる。しかし、成務紀の記事では成務六～四十七年と同四十九～五十九年の計53年間の空白がある。この空白を在位期間から除けば349年即位となるが、空白期間を8年縮めて341年即位とする。〔成務元年の条に「太歳辛未」とあり、これが皇年131年に当たるので、西暦との差210年の限の良い数とするため〕因って、景行天皇崩御年は340年となる。

(2) 景行天皇即位年の考察

景行紀の要約にあるように、記事空白期間が計27年あるので、これを景行在位期間60年から除くと在位33年間で308年即位となる。しかし、景行元年の条に「太歳辛未」とあり、皇年71年であるので景行天皇即位年は301年とする。

(3) 景行紀と倭国

①倭国の狗奴国平定

次に景行紀の分析により倭国・九州王朝の動静を考察する。景行紀の要約の a b i k m o q r s は、近畿政権の動静であり、c～hとlが倭国・九州王朝の動静である。この倭国動静のgの内容を見てみると熊襲討伐というより、物見遊山のようなようである。つまり、この地域は既に平定されており、巡察行と考える。

gの十八年の条にも「筑紫国を巡^{めぐり}みそこなは^は狩し」(新編『書紀』①、357頁)とある。では、いつ頃平定されたか。それは、『肥前国風土記』総記の条に「朝庭、勅して肥君等の祖健緒組^{うけたまは}を遣りて伐ちたまふ。茲に、健緒組、勅を奉^{あるかた}りて悉に誅^{つみな}ひ滅^{ほろぼ}しき。兼、国裏を巡りて消息^あを觀察^みしに、八代県^{やど}の郡の白髪山に到りて日晩^{ひく}れて止宿る」(新編『風土記』311頁)とあり、この時期を崇神天皇の御代としている。

つまり、景行天皇代より以前に肥後国の平定が行われているのである。即ち、この逸話は、300年以前に壹與の邪馬壹国が狗奴国を討伐している事を伝えている。また、『晋書』は狗奴国の討伐について記していないので、壹與が使者を派遣した266年以降の事となる。さらに、『新羅本紀』の287年以降の記事に倭人・倭兵との戦闘の様子が書かれている。

因って、倭国である壹與・邪馬壹国の狗奴国平定は270年頃と考える。

②倭国の豊国・日向国の平定

景行紀の要約c～fは倭国による九州島東側の国である豊国と日向国の平定譚である。この時期を景行即位の301年以降で考察してみる。

この頃、中国及び半島において大きな動きが起きた。中国では、300年八王の乱が起き、304年五胡十六国の乱が起き、317年司馬睿が晋王(東晋)を称した。また、半島では高句麗が312年に楽浪郡を、313年に帯方郡を滅ぼした。こうした状況から察するに大陸・半島から倭国へ多くの人の流入があったと考える。これらの人を受け入れる為の土地が必要となり九州島東側の平定が行われたと考える。『隋書』にある秦王国もこれらの国の一つであろう。

因って、豊国と日向国の平定時期は320～330年頃と考える。

③熊襲の倭国への再侵入

景行紀の要約1は熊襲の倭国への反撃と再侵入を伝えている。この再侵入は330年以降であるが、再三あったと思われる。そして、仲哀紀には倭国の中心までの侵略があったようである。それが神功紀にある熊襲討伐である。

因って、330～360年において熊襲の倭国侵入は再三あったと考える。

4. まとめ

以上が壹與・邪馬壹国の後半のである3世紀後葉から4世紀中までの倭国・九州王朝の動静である。そして、九州王朝は新羅本紀・百濟本記にあるように半島との交流が盛んになった。また、近畿政権への関与も盛んになった。それが、神功紀・応神紀・仁徳紀・雄略紀から読み取れる。

阿蘇の狩尾遺跡での製鉄跡

一宮市 畑田寿一

1 狩尾遺跡の鉄出土品の状況

阿蘇の狩尾遺跡の全貌を掴むため、報告書のまとめの一部をまず眺めてみたい。

25年ほど前に作成された報告書である。

狩尾遺跡群に属する遺跡は、弥生時代後期の遺跡として比類なく鉄製品を多く出土した遺跡であり、鉄製品を抜きにして遺跡の性格を語りえない。遺跡群全体の鉄製品は318点である。鉄製品の出土状況には注目すべき2つの特徴があり、ひとつは床面での鉄片の出土であり、他は、遺構埋土より廃棄状態での鉄製品の出土である。出土した鉄製品の過半が床面を離れていることは、一見、資料価値を貶めるようであるが、実はそうではなく、再利用されず廃棄された鉄製品の多さこそが、

この遺跡群では鉄製品が貴重品ではなく、ありふれた「捨てるほど」ある品物であることを如実に示している。

さらに床面での鉄片および鉄滓の出土は、集落の中で鍛冶ないし鉄器の制作がなされていたことを示している。

(熊本県文化財調査報告集代131集 狩尾遺跡群
1993年 熊本県教育委員会編 473頁)

鉄はこの時代貴重品であり、朝鮮半島での鉄資源獲得のため倭国は幾多の血を流してきた。しかし、この地では鉄は「捨てる程」あった。卑弥呼が生きていた時代の話である。

2 阿蘇盆地の阿蘇黄土

(1) 狩尾遺跡の位置

< 狩尾遺跡位置 >



遺跡は阿蘇山の北側に位置する阿蘇市の西部にあり、湯の口、方無田、前田、池田・古園の4地点であるが、いずれも外輪山の山裾に沿って流れる黒川沿いにあり、標高も500mと結構高い地点である。なお、この地点は山に向かって強い風が吹く地点として知られており、製鉄には最適地であった。

太古に阿蘇山と外輪山の間に火口湖ができ、鉄細菌が火山灰の中の鉄分を集めて水酸化鉄を作り、それが干上がってリモナイト(阿蘇黄土)として蓄積された。調査地点は鉄の原材料の上に位置し、しかも無尽蔵に近い埋蔵量であった。

(2) 精製したリモナイトの成分

成分	割合(%)
Fe	69.1
SiO ₂	13.7
Al ₂ O ₃	2.8
CaO	1.5

(出典：日本リモナイト(株)HP)

上記のように鉄分は70%近く含有されており、赤鉄鉱に匹敵する高品質な原料であった。

3 製鉄に対する報告書のスタンス

上記のような状況にありながら製鉄の可能性に対するスタンスは慎重そのものである。

その理由は主に次によるものと考えられる。

(1) 通説の製鉄の歴史とあまりにもかけ離れている。

当時の通説は6世紀のたたら製鉄が日本の製鉄の開始としており、それまでは朝鮮半島からの輸入によるものとしている。

(2) 日本では存在が否定されている低温製鉄の存在を認める必要がある。

最近では少しずつ存在の可能性が言われてきたが20年前までは否定されていた。

(3) 作られた鉄がリモナイトによるものと証明する必要があるが、原材料の上に転がっている鉄製品の元素構成分析を行っても反論意見が必ず出る。

(4) 炉や鉄滓から低温製鉄を示す鉄粒が見られなかった。

800℃程度の低温製鉄では鉄は溶けず還元抽出がされるだけであり、そのときできる鉄粒を叩いて集めるのが製鉄の工程では必須とされている。従って、鉄粒が見つからないことは製鉄の存在の否定に繋がる。

4 リモナイトによる製鉄実験

これらの考察の助けとして、リモナイトを使った先行各氏による製鉄実験の概要を眺めてみたい。

(1) 広島大学考古学研究室が行った実験 (広島大学考古学 研究室紀要2015)

項目	実験1	実験2	
原材料	リモナイト 500g	リモナイト 960g	
炉構造	七輪 2個重ね		
送風	強制送風		
燃焼時間	2時間		
加熱温度	1150℃	1200℃	
生成物 (含鉄物質)	3mm以下	15.9g	20.3g
	9mm以下	15.6g	28.3g
	10mm以上	34.7g	36.3g
	最大	28mm	35mm

① ここで使用されたリモナイトは阿蘇産である。

(1) 得られた鉄は、1回目が66.2g(13%)、2回目が84.9g(9%)であり、品質が高く、原料が微粉末化されている分、ベンガラによる実験よりよい結果が出ている。

(2) 生成物はいずれも磁石に反応するが、2回目の生成物の方がより強く反応した。

(2) 愛媛大学 東アジア古代鉄文化研究センターの活動

同センターでは、たたら製鉄をはじめいろいろな炉での製鉄の実験を行っており、2011年の活動ではリモナイトと七輪を使った製鉄実験を行っている。実験結果の数値などは公表されていないが、生成物を見ると広島大学の実験と同様の結果が得られている。

以上の結果から、1200℃程度まで温度を上げれば鉄の溶解が始まっており、炭素含有量を上げないで鉄の塊を得たことが覗える。しかし、まだ相当量が鉄滓に含まれており、リンの添加などで融点を下げる技術の存在が欠かせない。(リンの添加については古代からの言い伝えもあるが技術としては再現できていない。)

5 狩尾遺跡の状況

(1) 出土した製品

製品では、武器のやじり鍔が最も多く、農機具がこれに次ぐ。この地は肥(火)君の支配下にあり、狗奴国の武器製造所であった可能性が高い。

時期が特定できれば倭国大乱や狗奴国と邪馬台国との戦いがある程度証明することができ

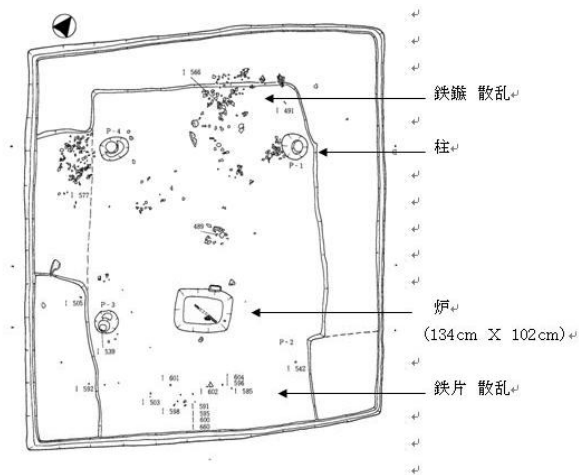
る。

単位:個

遺跡	湯の口	方無田	前田	池田古園	計
時期	後期	中期	後期	弥生後期	—
鉄鏃	55	11	3	54	123
刀子	4	4	1	4	13
鉞	38	2		13	53
手鎌	15	1		10	26
斧	1			4	5
不明				5	5
鉄片	68	10	1	64	143
鉄滓	160			7	167

(2) 湯の口2号住居跡の状況

< 湯の口2号住居跡 >



住居跡 9.42m X 8.44m 鍛冶工房 床にベンガラが散乱
(狩尾遺跡群, 1993年, 熊本県教育委員会編24頁)

冒頭の報告書の記述がこの遺跡に残されている。炉の周りの床にはベンガラが散乱し、南と北側に鉄製品が散乱している。ただし、北側の鉄鏃は事情が少し違うようで、この工房が閉鎖されたときに捨てられた可能性がある」と報告書は記述している。

炉は羽口を持たないが、鉄滓は千度以上の高温に晒されたと思われるガラス化が現れている。

状況からみると、リモナイトは一旦焼き固められベンガラ化した上で原料とされた。操業は強風の吹くシーズンを選んで行い、そのために送風装置を必要としなかった。

(3) 遺跡の時期

方無田地区からは黒髪式土器が出土し弥生中期とされているが、その他は弥生後期の初め(3世紀中頃)と想定されている。ただし、津袋式土器と類似があるする報告もあり、この場合、4世紀になってしまうが、最盛期は3世紀中頃と考えて良さそうである。

遺跡は弥生時代の終り(3世紀末)には衰退し、大型の建物も無くなってしまった。

6 未解決な課題に対する考察

(1) 報告書が製鉄跡と記述しなかった理由に対する考察

報告書が製鉄跡と記述しなかった最大の理由は鉄粒が発見されなかったことによると思われる。しかし、1200℃で一部溶解が始まっており、リンなどの添加による溶解温度の引き下げ技術を持っていたとすれば鉄粒が発見されなくても不思議ではない。今後の研究に期待したい。

(2) 鉄片が散乱している理由に対する考察

鉄鏃を作成する際、矢柄の部分とのバランスから重さの統一が求められる。そのための規格外品が散乱している鉄片ではなかろうか。なぜ再利用しないかは疑問であるが、この時期、倭国にはリサイクル炉(鉄を溶かして脱炭素化する)技術が無かったか、鉄を溶かすより微粉末化している原料から作った方が早かったのではなかろうか。

(3) この地での操業を中止した理由の考察

九州の土器編年に詳しくないので断定はできないが、卑弥呼の死後、再度騒乱が起き、それが収まった頃に衰退を向える。この想定が正しければ狗奴国での武器の作成の必要が無くなったためと考えられるが、それより燃料とする森林の枯渇によるものの方が大きいのではなかろうか。

(4) 報告書編者の見解

最後に、報告書編者の見解を抜粋して考察を終りとしていたい。

最後に何ゆえに狩尾遺跡群で、鉄製品の生産

がなされたかを考えたい。鉄製品の出土状況はほとんど使い捨てであり、破損品を補修あるいは回収して再利用されていない。これは生産地ならではの鉄製品の消費状況であるが、仮に舶載品である鉄素材にすれば、あまりに浪費的な消費に過ぎ、また陸揚げ地点からもかなりの遠隔の山間地で地金を鉄製品に加工する必然性は乏しい。こうした困難は、ただひとつ地金は舶載品でなく在地での製鉄からなされたとして氷解するものであるがこの解明は今後の課題である。

(狩尾遺跡群, 1993年, 熊本県教育委員会編476頁)

7 まとめ

発掘当初はあまりに通説と異なるため、報告書も製鉄が行われたと断言できなかつたと思われるが、その後の研究の積み重ねにより、この地で製鉄が行われたと考えて間違い無いレベルまで到達したと言える。

九州において3世紀後半から4世紀初頭にかけて作成されたと思われる鉄製出土品は約6千点あるが、その内、熊本湾に注ぐ菊池川、白川、緑川の流域では2千点(30%)が出土する。

この時期、大和地域では殆ど鉄製品が出土しないので、日本の文化の中心は九州にあり、白川の上流に位置する狩尾遺跡は鉄製品の生産地として貢献したと思われる。

菊池川流域には大規模な集落跡も見つかっており、これらを含めて眺めてみると狗奴国の姿がおぼろげながら見える可能性がある。機会があれば一度挑戦してみたい。

倭の五王 — 『宋書』の倭國 — その6 名古屋市 石田敬一

当会報誌の205号(同年9月号)では、仁徳記・仁徳紀に記される難波宮は筑紫・難波にあるとし、難波高津宮に想定した伏見神社本宮の御祭神、淀姫命は、物部氏の始祖とされる饒速日尊に関わり、また履中記・履中紀の石上神宮

(石上振神宮)についても物部氏に関わる遠賀川流域の古物神社である可能性を示しました。

さて、『古事記』では、「倭比賣命賜草那藝劍」とあり、倭建命(以下、日本武尊とする)は草那藝劍(以下、草薙劍とする)を受け取った後、「故、到尾張國、入坐尾張國造之祖・美夜受比賣之家」とあって、尾張国へ行き尾張国造の祖美夜受比賣(宮實媛)の家に入ります。これは、日本武尊が尾張氏に入婿したことを意味し、その際に草薙劍が奉納されたのではないかと思います。とすれば、この劍は尾張氏の所有になったのですから、これを美夜受比賣のもとに置いたまま伊吹山に出かけたことに不自然さは感じません。一方で、日本武尊が伊吹山で敗北し命を落したのは、草薙劍を持たずに出かけたためであると言いつけているのでしょう。

草薙劍に関する説話として、書紀は次のとおり記しますが、『古事記』は、一切、この事件について記しません。

是歳、沙門道行、盜草薙劍逃向新羅、而中路風雨荒迷而歸。

(天智七年) 是の歳に沙門道行、草薙劍を盗み新羅に向かい逃げる。而して中路に風雨荒れ迷いて帰る。

戊寅、卜天皇病、崇草薙劍、即日送置于尾張國熱田社。

(天武朱鳥元年六月) 戊寅に天皇の病をとうに草薙劍に崇れり。即日尾張國熱田社に送置す。

なぜ、僧侶である道行が草薙劍を盗む必要があったのか、なぜ新羅に持ち去ろうとしたのか、なぜ草薙劍が天皇を崇めるのか、天皇は三種の神器を放棄したのか、なぜ熱田社に送られたのか、このように草薙劍の盗難事件については、いろいろな疑問があつて、本当に起こった事件とは思えません。また、『古事記』には草薙劍に関しての説話がありませんので、この事件の多くは作り話と思われます。が、何らかの意図があつて書紀に記述されていることは間違いがありません。修飾された事柄を除いて経緯のみを整理すれば、神劍は一時的に天皇の手元にあつたが、最終的には熱田社に送られたということ

しょう。

沙門道行は、熱田の草薙剣を盗み囚人となったものの、その後、修行を積み天智の病をなおしたことにより、愛知県知多市の法海寺を開基できたといわれています。しかし、神剣の盗みは大罪であり死刑に処せられて当然ですから、道行が盗みを犯したというのは大いに疑わしく思われます。神剣盗難の話は、神剣を熱田社に送致しなければならなかった書紀の言い訳であり、沙門道行と天皇側の立場が逆転しているように私には思われます。本来は、尾張から取り上げ十数年にわたって返さなかった天皇側から、神剣を取り戻そうと尽力したのが道行で、尾張氏は、その道行を讃え、法海寺の開基を支援したのではないかと思います。

<法海寺と熱田神宮>



この事件は、草薙剣が、天皇の手元でも伊勢神宮でも石上神宮でもなく、熱田社に送られた理由の説明もありますが、別の見方をすれば、三種の神器のひとつである草薙剣を尾張に送るとは考えられませんので、これは三種の神器ではなく、やはり日本武尊が婿入りの際に尾張氏に奉納した神剣とする方が妥当でしょう。この事件は、天皇側の言い訳づくりのために書紀編纂時に創作されたと考えられます。

ところで、景行五十一年の時点で、「熱田社」が名古屋の熱田神宮であったかどうかは疑わしいと思います。

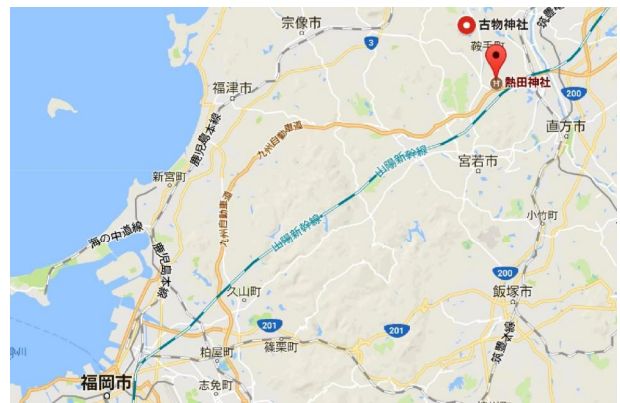
景行五十一年八月に「初日本武尊所佩草薙横刀、是今在尾張國年魚市郡熱田社也」の記事が

あり、「熱田社」が初登場しますが、この記事は、「今」つまり書紀編纂当時には、草薙の横刀が尾張國愛知郡の熱田社にあるという意味であって、この景行五十一年の時点での神社名は記されてはいませんから、このときの神社名が果たして名古屋の熱田神宮であったのかどうかはわかりません。

名古屋の熱田神宮は、その創祀によれば、日本武尊も宮簀媛も亡くなってから創建された神社であり、しかも、その際の社名は氷上姉子神社（尾張國愛智郡氷上邑、現・名古屋市緑区大高町火上山1-3）であって熱田社ではありませんので、書紀の朱鳥元年の「熱田社」には合致しません。ですから、名古屋の熱田神宮は、この盗難事件の時点では、記事の「熱田社」と呼ばれていたかどうかはわかりません。

名古屋の熱田神宮は、もともとは熱田神社であって、明治元年（1868年）になって神宮号を宣下され権威づけられたのです。つまり、草薙剣とされるものは、尾張氏の所有物であった剣とする以外に、尾張へ送る意味がないといえましょう。

<古物神社と新北の熱田神社>



にぎた
鞍手町新北の熱田神社の御由緒には、景行天皇二十七年の冬、日本武尊は熊襲征伐の際に新北の亀甲の地名に心を打たれ、天神地祇を祀ったとあります。これをきっかけとして、村人が拝殿を造り、日本武尊は、熊襲征伐の帰りにここへ立ち寄って、報賽すなわち祈願成就の御礼の参拝を行ったといわれています。

新北の熱田神社の古宮とされる鎮座地亀甲は、剣岳のふもとにあり、現在、鞍手町新北亀ノ甲の地名が残っています。この新北の熱田神

社に日本武尊が立ち寄った理由が亀甲の地名というのは、やや理解に苦しむところですが、戦勝祈願し成就して祀ったことが神社の起源とすれば、ここへ神剣を奉納したのは筋がとおるように思います。

なお、その後の文治元年（1185年）に、新たに神殿を構え、名古屋の熱田神宮を勧請し、元弘元年（1331年）に約600m南東の現在の社地（鞍手町新北1565）に遷座されたということであり、この勧請により由緒に混乱が生じたと思われま

す。つまり、草薙剣にかかる説話は、名古屋の熱田神宮の出来事であり、また新北の熱田神社の由緒書きにある説話は、新北の熱田神社の出来事であって、それを書紀がともに同じ日本武尊に関わる話としたことから、古物神社の由来と、名古屋の熱田神宮にかかる草薙剣の盗難事件とが結びつけられて伝承されるようになったものと思います。これは、近畿中心の立場で、九州、尾張、それぞれの地域における征伐の話を書紀に取り込んだために生じたと考えられます。

ところで、名古屋の熱田神宮は、「あつた」です。これに対して、新北の熱田社は、もともとその地名からして「にぎた」であったはずで

す。後代に名古屋の熱田神宮を勧請したため熱田の「あつた」の読みに統合されてしまったようですが、「熱」は現在でも「熱り立つ」というように「いき」ですから、「熱田」は「いきた」が訛ったもので、本来は「熱田」と書いて「にぎた」ではなかったかと思

いますが、先の『古事記』の記事で履中が逃れた石上神宮とは、物部氏の軍事拠点としての地域性、及び筑紫に宮を構えていた仁徳の御世という時代性、そして石上神宮の元社である布留社の名称から、この新北の古物神社を指しているように思われます。とすれば、履中が石上神宮に逃れた説話も北部九州での出来事であったと考えられるのです。

前回の例会の内容

■『記・紀』神話と倭國

一宮市 竹嶋正雄

記紀の州・島の記述順が時代と共に変化し、北部九州中心から近畿中心とした記述順になっているとの視点から推移の時期を段階的に示した。

■倭の五王―『宋書』の倭國―その5

名古屋市 石田敬一

古代の難波や河内は、北部九州の地名であり履中は北部九州を本拠地とした王者すなわち天皇であって、『宋書』のいう讚の可能性のあるのではないかとした。

例会の予定など

■ 今月の例会

(1) 日時 10月15日(日) 13:30~17:00

(2) 場所

名古屋市市政資料館 第2集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

(3) 参加料 500円 (会員は不要)

(4) 交通機関

・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分

・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分

・市バス「市政資料館南」、北徒歩5分

・市バス「清水口」、南西徒歩8分

・市バス「市役所」、東徒歩8分

(5) 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会 11月19日(日)、12月17日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を25部用意ください。

■ 投稿締切日 10月30日(月)

・全て11ポイントでべた打ちしてください。

■ 投稿先(編集担当:石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp